

日本における身体技法の近代化の問題点と解決策

石 田 かおり

Issue and a Way of Solution of Modernization of Body Usage in Japan

Kaori ISHIDA

ABSTRACT

In this paper we will make evidently the issue of the modernization of body usage and will try to propose a solution of it.

The modernization in Meiji Restoration was westernization and modernization of the structure of society and of our way of life. The modernization requested us standardization of our body and body usage. We have been carried out this in education, march symbolizes it.

To solve issues caused by modern value standard it is necessary to realize the new value, which we have proposed in last three papers, that is “The Beauty of Each Person and Each Age”, based on “Slow Beauty”. In modernization and westernization we successfully introduced material elements but we could get acquired only few body usage. At this result we have double stratum in our body usage, the traditional one and the modern western one. The action of modern Japanese is far from perfect and beautiful in western style clothes, but also in Kimono we don't know how to move our hands and legs. Therefore we can make ourselves conscious making use of this gap between two stratum in our body usage.

I have been trying it at one of my university's class for five years. At first, students learn knowledge of Kimono by lecture, aim to learn traditional sense of beauty. After that they learn how to wear and fold up Kimono by using Yukata (a kind of Kimono, which is the most simple and the most informal). And the next they actually move themselves in Yukata, stand-up, sit down, walk, stand still, bow and so on. At last they learn a short piece of Kabuki Dance for two months.

Aiming to be beautiful our consciousness of our own action is one way to realize the new value in coming society. I hope that such trial in my university class is spread and many people will do their own action in consciousness on their body usage.

1. 「日本人の動作が格好悪いのは洋装の歴史が浅いから」という言説
「日本人は歩くときに膝が曲がったままなので格好が悪い」という言説をよく耳にする。そこにまるで証拠写真のように、ハイヒールや厚底靴を履いて膝を曲げておぼつかない足取りで

歩く様子の女性の街頭写真を添付したものもしばしば目にする。このほかに、「椅子に腰掛けたときの足の揃え方が悪い」や、「立っているときの姿勢と足の置き方が悪い」など、洋服着用時の日常の動作について、美観とマナーの入り混じった観点から難点を挙げる言説をよく目にする。それらの多くには、明治維新に洋装と洋装に合った身体技法を導入してまだ日が浅いために、習得が未熟であるという論調と見受けられる。

それに加えて、最近目につくようになったのは、自室にいるのと同じような緊張感のまったく感じられない（だらしな）姿勢で戸外の地面に何の抵抗もなく座る若者の行動様式と意識に対して、怒りや嫌悪感や不快感を表現したり、マナーの点からの問題を指摘するなど、若い世代に新たに出現した行動様式に対する批判の言説も急増した印象を受ける。

しかし、これらと同じような趣旨の言説は明治維新以来日常生活のなかで再生産し続けられ、けって目新しいものではない。また、こうした言説は広く発せられ、共感を持って読まれ続けている。その背景には何があるのか。ここに、生活における美に関わる学術および教育的契機を見出すことができるのではないか。本論では、こうした言説の背景に存するわれわれの価値観と、価値観が由来する社会的構造を明らかにした後、今後の方策を模索することを試みたい。

いま例に挙げたような言説は、大きくは2つの観点から発せられている。1つはマナー、礼儀作法に照らし合わせて正否を論じるものである。もう1つは好印象であるか醜悪であるかという、美観の善し悪しから発せられる美的観点である。礼儀作法は抽象的なものとして存在しているわけではない。礼儀作法は身体とその動作を伴って初めて成立するものである。礼儀作法は一種の身体技法ということが出来る。また、美醜を論じる観点にしても、ここで論じている

対象は身体技法である。いずれにしても身体技法に対する言説と考えることができる。

共通点はそれだけではない。礼儀作法は躰と呼ばれた主として家庭における教育によって伝承されてきたものだ。そして、礼儀作法に適ったものはおのずと美しさを感じさせるものとされてきた。美的な身体技法を伝承する伝統が存在し、一定の身体技法に美を見出す共同体(社会と言い換えてもよい)に共通の認識が存在するということができる。

2. 「型」を用いた教育・伝承

この、美を感じさせる一定の身体技法を伝承する方法に「型」と呼ばれるものがある。たとえば、子供に箸の持ち方を教える場合を例にとると、大人が実際に箸を持って見本を見せて、その形をそっくりまねさせる。なぜこのような持ち方をしなければならないのか、このように持てばどんな合理性や利便性があるのか、別の持ち方ではなぜいけないのか、といったことは一切説明しない。子供はただ黙ってひたすら身体を用いてまねをし、それを繰り返すことをさせるのみである。型を用いた教育法・伝承法にこのような特徴がある。習う者は師に問うことは許されない。ただひたすら黙って師をまねるのみである。

「型」という文字は「かたち」とも読むことができるが、その通り、かたちから入る。「なぜそうなのか」と問うのは師に対してではなく自分自身に対してである。ひたすら師のまねを繰り返し、自問自答を繰り返すうちに、いつのまにか内実を伴ったかたちを習得している。「型」を用いた教育法・伝承法とは、かたちを身に付けることから始まって、やがて内実を伴うようになる、という考え方をとる。

「型」を用いた伝承は、日本の伝統芸能や伝統工芸、武術、大工の仕事等の高度な技術におい

て実践されてきただけでなく、家庭における料理や掃除の方法等の家事や、服の着付け、箸の持ち方からトイレの使い方に至るまでの生活技術全般においても伝統的に支配的であった。しかし、太平洋戦争後は、家庭における躰は軽視されるか、または悪しき封建的な教育として排除される傾向が強まり、それと同時に地域共同体の弱体化と解体が進むことにより近所の大人や見知らぬ居合わせた大人による躰も廃れ、いまや「見て習う」教育は少数派になってしまった。その裏返しとして、礼儀作法を知らず、自分自身の美観を意識する習慣を持たない若者が増加し、それに伴って冒頭のような言説が目立つようになったと考えられる。

本論ではこうした流れについての是非を論じることが趣旨としない。むしろ、「型」を用いた教育・伝承法が廃れたことによってどのような問題が生じたのか、そして、今後われわれはそれに対してどのような対処をし、どのような価値観を構築すべきかを考えて行きたい。

3. 近代化とは

日本人の身体技法に大きな変化をもたらした契機は明治維新による西洋化・近代化政策の導入と言われる。生活様式、具体的に言えば、服装、住居、インテリア等が変化したので、身体技法も変えざるを得なかったことは容易に察せられる。しかし、環境の変化に合わせて身体技法を変えざるを得なかったという受動的な変化だけでなく、それ以上に、国家政策に基づく学校教育や国民教育を用いた意図的な変化も多大であったことを見逃すことはできない。

その変化のうち最大かつ典型的なものは、武智鉄二や三浦雅士等、これまでに種々の評論家や研究者が指摘してきたように、歩き方であろう。それは、右足が出るときには右肩が前に出るといふようにからだにねじれを生じさせない

ナンバの歩き方から、右足が出るときには左手が前に出るといふように腰を対称軸にからだを捻って手足を交互に出して腕を大きく振る、現在われわれが「普通」と思い込んでいる歩き方への変化である。今日われわれが「普通」と思い込んでいる歩き方を国民に習得させるため政府が実施したのは、軍事教練と学校教育である。

それまでとは違う近代型の軍隊の最大の特徴は、匿名性と言うことができる。近代以前の戦では、戦う前に自分が何者であるか名乗りを挙げ、相手もそれに応えて名乗りを挙げて、お互いどのような素性の人物か確認し合ってから戦うのが礼儀であった。それは、特定の個人対個人の戦いと言える。しかし、近代型の戦争においては、たしかに戦闘を行うのは個々の人間ではあっても、それは名前を持たない。配置された部署の仕事をこなすことが重要であって、誰であるかはどうでもよいことなのだ。こうした人員は交換可能である。負傷したら別の人員をその部署に補充すれば、隊全体としての働きにはなんら支障はなく、なんら問題は生じない。

そして、こうした匿名の個人の集合体としての軍隊の規律を象徴的に表わすものに、動作と外見の同一性がある。外見の同一性は制服の着用と同じ髪型によって保たれる。匿名の同じ外見をした部品としての人間である。動作の同一性は行進によって表される。隊列を崩すことなく、同じリズム、同じ歩幅、同じ方の足と同じ方の手を出して歩く行進。明治の軍事教練では鉄砲の使い方以前に行進の訓練に力を入れた。それまでの日本には、集団が一斉に同じ動きをする習慣は皆無であったので、行進ができなかったからだ。一揆の行進といえども、歩幅も手足を出すリズムもすべてまちまちだった。動作が揃った行進ができるようになるために多大な苦勞をしたことは、武智らの著作に詳しい。

近代の軍隊と学校、この2つの組織は同じ考

え方に基づいているために、そこで実行されることもよく似ている。明治政府の新教育で設立された学校では、まず学生の外見を同じ形にした。制服を着せて、髪型には数種類の選択肢があっても遠目には微差に見える一定のものにさせた。学校では行進の訓練もよくするが、そもそも一斉に同じ行動をとることをよくさせる。その学校の生徒らしさを重視し、個々の人間のアイデンティティよりも学校全体の秩序を優先するよう指導する。これは過去の話ではない。現在も多くの学校にはこうした性格がしっかりと残っている。

以前、健康について論じたときに述べたことと同様(注1)、こうした軍隊における教練と学校教育での訓練に見られる身体技法の改変は、明治維新政府が国家の構築の根本原理に採用した近代合理主義に由来すると考えられる。合理主義は合目的主義、すなわち目的を達成するためにもっとも効率のよい方法が最善であるという考え方でもある。国民個人よりも国家を最優先とし、その国家のめざす姿は「富国強兵」というスローガンに象徴される経済大国でありかつ軍事大国であった。ここに合目的主義を当てはめれば、国民は富国強兵国家の実現のために奉仕する個々の実働部隊として位置づけられる。国民は、産業革命によって開発された新技術に基づく大量生産体制の担い手となる勤労者となり、強大な軍事力の担い手となる。近代産業にせよ近代型軍隊にせよ、そこで必要とされる個人とは、さきほど軍隊の例で見たような匿名の個人である。それは、いわば、部品と言い換えることができる。その部品となって奉仕する人間を教育するために学校があるのだから、学校が軍隊に似るのも当然である。このような事情であるために、国民の健康は国家の一大問題として浮上したことは、前論で述べた(注1)。

こうして軍隊や学校等の場を利用して国家に

よる新しい国民の育成が始まった。それでは、身体技法についてはどうであったか。本来ならば、前近代型の身体技法は伝統的な生活様式にとっては従来の身体技法が理に適っていても、新たに導入した西洋近代の生活様式には適っていないと考えられるので、身体技法も教育しなければならないはずである。洋装や建築、家具などの物質的要素は、指導者を招聘したり留学生を送るなどして、学んだりまねをすることは難しくない。そして、現実にもこのようにして、相当程度精緻に取り入れることができた。だが、このときに身体技法までしっかりと視野に入れてはいなかった。身体技法のうちでもとりわけ目に付くところをまねた結果、行進訓練による歩き方の改変程度にとどまってしまった。

矢田部英正は、歩行や立ち方、座る姿勢など、日常生活の動作を洗練させたいと思う人や、それらの動作から生じる身体の痛みを解決するための相談を受けるうちに、それらの「問題」は、明治維新によって生活の中の道具や生活様式の西洋化が図られたにもかかわらず、身体技法の西洋化に思い及ばないまま現在に至っているがゆえの「問題」であることに気づき、次のように指摘している。

たとえば西洋の服飾様式には、それに相応しい生活上の作法が厳然としてあり、そこから生まれる「身体技法」に基づいて、靴や鞆などのデザインが様式化され、椅子やテーブル、ベッドなどにも一連の調和が与えられている。……

私たちは物を所有するだけなら簡単にできる。しかしその物を使いこなすには結構時間がかかる。ましてやその物が異文化の産物であったのならば、単なる模倣ではなく自国の文化に馴染むように解釈し直さなければならな

い(注2)。

この「自国の文化に馴染むよう解釈し直す」ことのなかでも重要なことに、自国の身体技法と導入する異文化の身体技法の磨り合わせがあるのだが、それに気づかぬまま、そしてそれをしないまま今日に至ってしまったことが、本論の冒頭の言説のような、現在われわれのあいだに見られる身体技法に由来する外観の例となって現れていると考えられる。こうした事態の解決法は、美的観点からすれば、各自が道具に合った身体技法を意識して、その訓練をすれば、自己の身体において美的価値を実現することができて解決することになる。

しかし、解決法は後の章に譲って、その前に、なぜ物的導入は成功しても身体技法の導入ができなかったのか。それは、物質的要素は容易に認識されるものであるのに対して、身体技法は「身体技法」という概念がない限り、認識されがたいものが多いためと考えられる。再び矢田部の指摘を引用しよう。

しかしながら、基本動作の特徴は習慣的な反復によって無意識の内に身につけているため、「自分の身体がどうなっているのか」ということの詳細は、一般的にはほとんど自覚されることがない。このために無意識の底に沈んでいる「習慣的な身体」に「気づき」を与え、身体を自由に使いこなす技術を持たない限り、私たちはなかなか自己本来の自然に到達することができない(注3)。

たしかに、自転車に乗ることができるようになったばかりのときには自転車に乗る際の細かな身体のあり様を意識したが、十分に乗れるようになって自分の身体のあり様などすっかり忘れてしまっている。また、すっかり忘れた状態が「乗りこなす」といわれる状態とも言える。

身体技法にはこうした特徴があるために、その導入に気づくことすら難しいものである。

4. 近代が求めた画一的身体

ところで、身体技法に着目して近代化を反省した場合に、そこにどのような問題が浮上してくるのだろうか。

身体技法の近代化の典型例として先に挙げた行進をもういちど取り上げてみよう。

なぜ行進が重要であったのか。それは、富国強兵を実現するために部品となるべき実働部隊としての個人という人員が必要であったからだ。しかもその人員の量は大量であって、全国民が部品になることが国家の近代化にとって不可欠であるという考え方であった。

この部品という身体は、画一的身体である。部品の最大の特徴は交換可能性であるので、規格に従った画一的なものでなければならない。したがって、そこでは個性はまったく要求されない。それどころか、個性があると画一化が妨げられ、交換可能性が成立しなくなるばかりでなく、一律の集団行動にも支障をきたすので、個性は却って厄介な「悪しき」ものである。

また、産業革命以降の近代型大量生産体制には身体の画一化が不可欠である。三浦雅士も指摘しているように、(注4)大量生産が可能となるためには規格が必要であり、規格を支えるのは画一的身体であるからだ。たとえば軍隊における制服は、隊員ひとりひとりの身体のサイズに応じて1着ずつ生産しているわけではない。規格を作成し、数パタンの身体モデルを作成し、それに基づいて作成された制服のうち自分の身体にもっとも近いサイズのものを着用している。既製服とはそもそもこうした発想の下に存するが、最初の既製服は軍服であった。また、銃等の武器にも規格があり、大量の隊員のために大量のまったく同じ銃を作成した。こうすること

で、ある銃を所持していた隊員が死傷しても、その銃を別の隊員に使わせることができるようになった。人員も部品であるが、服や銃といった物品も部品である。

ところで、近年しばしば日本人の特徴で「問題」とされているものに、日本人には個性が乏しいことや、その原因として学校教育によって個性の芽が摘まれてしまうという言説を目にするが、学校教育の基本が明治維新の国家政策に基づいたままである限りその目的は本論の表現を用いれば部品の生産にあるのだから、当然のことと言えよう。

身体の一画一化は、国を挙げて近代化を図っている国家には一般的に見られることである。現在、多くの国家において近代が終焉しつつある一方で、近代化を図っている最中の国家もまた少なからず存在する。近代化の最中の国家を見れば、明治時代から太平洋戦争にかけての日本と同じような例は容易に見つかる。

しかし、近代化を遂げた後じゅうぶんな時間が経過し、近代原理による社会の運営がもとになって諸問題が発生し、社会の基準となる価値観の変更を迫られる時点に至ったのであれば、いまだに近代の価値観にしがみついていることは問題である。現在の日本の社会はまさにそうした局面を迎えているのではないだろうか。それならば、今後われわれはどのような価値を社会の中心に据えて、どのような方法で脱近代を図って行くのがよいのだろうか。

価値に関しては、本論に先立ついくつかの論文で取り上げたので、ここでは詳述はしない(注5)。本論では、新しい価値の導入方法について考察したい。

5. 和服による身体技法の意識——脱近代の価値観の普及方法

本論に先立つ3つの論文(注5)で提案した価

値観とは、「スロービューティー」に基づく「人それぞれ・年それぞれの美しさ」である。「スロービューティー」とは、「スローライフ」の価値観に基づいた美的価値観のことである。合理的価値に基づいた目的達成と結果を偏重する近現代の生き方である「ファストライフ」ではなく、過程を重視した意味での「スローライフ」呼ばれる生き方の提案とその活動は、すでに存在している。この価値観を前提に、美的価値について見れば、「ファストライフ」における結果偏重は画一的な価値観に行き着き、若さと健康だけが美に結びついた。一方、過程重視は多様な価値の共存に行き着く。そのために、今後の脱近代社会における美的価値は、若さと健康だけはない。若いときの美しさも認めるが、それだけではなく、何歳であっても、その年齢にしかない美があるという意味の「年それぞれの美しさ」である。また、それと同時に、画一的ではない美という意味での、また、人は皆顔や体つきが違うのだからその人の個性にあった美もまたひとりひとり違うという意味での「人それぞれの美しさ」もある。この2つの表現を併せて「人それぞれ・年それぞれの美しさ」という。これは、社会における美的価値の多様性を表現しただけでなく(「人それぞれの美しさ」、個人の内部での美的価値の多様性をも表現したものである(「年それぞれの美しさ」)。

さて、こうした美的価値を社会の内部で実現するためにはどのようにすればよいのだろうか。本論では身体技法に焦点を絞って考えてきたので、ここでは、美しい身体技法を各自が自己反省し、自ら学ぶ姿勢を獲得することを提案したい。なぜ美しい身体技法なのか。それには2つの理由がある。第一の理由は、近代化は身体と並んで身体技法の一画一化を図ることもあった。画一化の過程では、個人は自分自身の手や足の動きといった身体技法を意識させられ、常にそ

れを自己監視、自己制御するよう強制されていたが、いったん習い性となってしまえば何も考える必要はなくなる。近代化が終了し、近代原理に基づく高度な社会に生きる現在のわれわれは、ナンバ歩きを西洋型の歩きに意図的に変える必要は皆無の段階にいる。そうした状態において、いま一度個人が自分自身の身体技法を自覚することは、自分自身の生活基盤となっている社会の構成原理を意識することにもなると考えられるからだ。第二の理由は、近代社会が個人に要求した身体技法は富国強兵という国家の状態の実現が目的であった。そこでは個人は部品であり、個性が悪しき邪魔者であるように、個人にとっての問題はどうでもよいものである。これに対して、身体技法の美を意識することは、個人が各個人のあり方を意識することになる。美という観点を導入することで個人は部品ではなく重要なテーマとなり、個性もまたそれに付随して考慮の対象になる。これらの理由から、脱近代の価値を考え、実現する上で、美的価値の導入は少なからぬ効力があると考えられるからだ。

さて、身体技法を意識し、身体技法を手段として利用する場合には、すでに身につく無意識の動作になっている身体技法がどのようなものであるかを問うことから始めざるをえない。われわれの場合、いま現在どのような身体技法の状態にあるかということ、明治維新以前の伝統的な身体技法と、その上に導入された西洋風の身体技法、この二層構造を身につけていると考えられる。ここで、近代化以後の西洋風の身体技法だけを視野に入れば十分であるという反論が予想されるが、本論冒頭の例やこれまで見てきたことから、われわれは完璧に西洋風の身体技法を身につけたのではなく、導入は一部にとどまっているために、二層構造から始める必要があると考えられる。

実は、この二層構造をしていることが、身体技法を意識させるのに好都合である。古い層と新しい層との間のギャップを利用することで、身体技法を意識することが容易にできるからだ。そこで、和服を用いた方法を考え出した。

着慣れない者が和服を着ると、己の身体をどう置けばよいのか困惑する。立っているときの足の位置、手の位置、姿勢、重心の置き方。歩くときの手の振り方、足の出し方、爪先の方向、重心の置き方、重心の移動のさせ方。座位から立位へ、立位から座位への動き方。など、日ごろ何も意識せずに行っていた動作ひとつひとつのすべてが困惑の対象になる。それは、生活の中から和服が消えて、それと同時に和服の身体技法の伝承が途切れてしまったからだ。和服を着た人を見ると珍しく感じて目で追ってしまうような現在、和服の身体技法の見本となる者を探したくとも日常生活の場では探しだすこともできない。

しかし、こうした状態であるからこそ、身体技法や美しい姿勢を意識させたいのなら、和服は非常に便利で効果的な道具と言うことができる。

二層構造という視点で言えば、近代化された身体にとっては和服を着ると動作に困惑するが、では洋服着用時に完璧に美しく立ったり歩いたりできているかということ、決してそうではない。谷田部等の指摘からも明らかなように、歩き方を見ると重心が前方にあるために、膝が曲がって歩いているように見えて見苦しい。そのように、洋服着用時には伝統的な(和服着用の時代の)身体技法の名残が目につき、それが美的欠点となって感じられる。しかし、和服を着用すると困惑してしまうように、伝統的な身体技法もすでに使いこなせなくなっている。伝統的な身体技法は身体のどこかに残ってはいるのだが、本人も無自覚であって、洋服で歩いても格好悪い

が、和服で歩いて無様という中途半端な位置にわれわれは立っている。

さらに、「スロービューティー」の観点からすれば、和服を用いることはたいへんにこの価値観に適っている。実際体験しれみれば共感することも多いと思われるが、初めて和服を着て一日を過ごした人はよく「ふだん目に付かない細かい、なんでもないことに気が付く」と言う。和服は過程を意識させるスローな衣服であり、そして前近代の衣裳という意味でも、スローな衣服と言えよう。

このように、和服は自分自身の修練にも、他人を教育するためにも、双方ともに美しい身体技法の反省と習得にとってきわめて効果的な道具と言える。さらに、洋服と和服の両方を着ることで、身体技法の違いと美しく見える動きの違いを実感することで、効果的な訓練ができると考えられる。

このようなわけで、数年前から和服を使った授業を構成し、実行している(注6)。この授業は講義と実習を併せたものである。講義では、日本の伝統的な美意識を知ることが目的にして、和服に用いられている染め、織り、柄、和服の諸知識、色に対する意識、日本の服飾史の概要などの知識を習得する。実習では、浴衣の着方とたたみ方を最初に習得し、その後浴衣を着た状態で立つ、坐る、歩く、お辞儀、贈答などの動作を覚え、日本舞踊を1曲習得する。前期は実習の予備知識となる講義と浴衣を着てたたむことを身に付け、後期は前期の知識を前提に他の実習をする。さらに後期の初回に半年間の美的目標を書かせ、後期の最終回に自分の書いた目標を返却し自己評価をさせて、美しい身体技法をより意識させるようにしている。

学生の反響では、毎年きわめて高い評価を得ている。それは第一に、ここ数年若い女性のあいだで流行している浴衣を自分ひとりで着られ

るようになるためだ。また、お辞儀などの動作を習うことで実生活にすぐに役立つ授業であると考えているためでもある。しかしそれらを差し引いても、自分自身のあるべき美しさを考え直す機会を得たことや、美しさは化粧法やダイエットなどの外見だけと思いついでいたところに動作や言葉遣いの重要性に気づいたことを挙げる者が履修者のほとんどを占めている。中にはこうした美しい身体技法を子供に伝承することの重要性を指摘する学生もいる。

この授業もそうであるが、それにとどまらず、まずは和服を着て己の身体技法に気付く体験をすることを少しでも多くの人に拡げて行くことが、今後の価値観実現のための1つの方法と考えられる。しかし、授業で毎年一定人数の履修者を出すにしても、私ひとりが実行しているだけでは限界が大きすぎる。そこで、「スロービューティー」の研究を始めた時点からマスコミや講演の場には必ず和服で登場し、講演や連載などの発言の場を使って和服を着ることで発見できることの重要性を訴えているが、それも一個人の行動では効果は微々たるものである。

しかも、体験するだけではまだ不十分である。身体技法を意識するだけでなく、「美しさ」も併せて意識することが重要と考えられるからだ。洋服と和服、それぞれの着用において、美的観点から言えば、それぞれの美しく見える身体技法を意識し、訓練し、使い分けるしかない。個人が個人的に意識をし、訓練をする。意識も訓練もしない人は、しなくても問題はない。ただ、そうした人は単に格好悪いだけだ。しかし、他人に迷惑になっているにもかかわらずそれに気づかないセンスは放っておくわけには行かない。たとえば電車内の床に坐って通行の妨げになるのは、美的にも問題があるだけでなく、通行の妨げという問題も同時にある。このような、美的問題と同時に「人さまに迷惑」という問題が

共存している例は日常多々見られる。こうしたことは、かつて家庭における躰によって厳しく注意され、その結果周囲の人を配慮する態度が養われたが、家庭もかつての形態を保つことが困難ないま、家庭にその役割を求めることが困難になっているばかりでなく、地域社会の崩壊によって地域社会での躰もなくなり、学校などの教育機関がその役割を担わざるをえなくなっている。

しかし、思い出してほしい。現在の学校は近代社会の価値観に乗った組織である。近代的組織に脱近代の内容をどこまで盛り込むことができるのだろうか。美しい身体技法の教育が、学校という近代型の組織を脱近代のものに変える契機になる可能性はないだろうか。大学も近代社会の価値観に基づいた組織であるが、そこでの授業で試みているようなことはできるはずである。ここに一つの方法が見えている。

6. むすびに代えて

美は一見するとやさしいが、その内部に多大な力を秘めている。美しいものには暴力や権力を想起させることなく人心を虜にし、当人が自覚しないうちに価値観を変え、行動を変えてしまう力がある。嬉々として人を従わせる力を持つものだ。だから、美は使いようによって諸刃の剣である。身体技法の美しさにもそうした可能性があると考えられる。かつて身体技法を画一化し、美的価値を画一化して、画一的な身体を創造することでファシズム国家に行き着いた例もある(注7)。反対に、多様な価値観が共存し、個人が生きることがより容易な社会になることのために、美の力を最大限に行使できるはずである。このためにできることは何か、筆者が長年の美的価値研究を通じて追究し続けていることである。

本論では身体技法に焦点を当てて、その近代

化と近代化から生じる問題点の解決策を探った。まだ試みの途上にあり、理論も整備されていないが、今後も理論と実践を併せながらこの方向性を追究して行きたい。筆者に共感し、行動を同じくする者が一人でも多くなることを切に期待している。

注

- 注1 次の2つの内容的に続いている論文を指す。石田かおり「健康美の時代」、『研究紀要おいでるみんな日本の化粧文化 明治維新から平成まで』、資生堂企業文化部、2002年と、石田かおり「近現代日本の美容行為における眼差しの力」、『駒沢女子大学研究紀要第9号』、駒沢女子大学、2002年
- 注2 谷田部英正『たたずまいの美学』、中央公論新社、2004年、15～16頁。
- 注3 同上書。14ページ。
- 注4 三浦雅士『身体の零度』、講談社、1994年、193～205ページ
- 注5 注1と次の論文。石田かおり「スロービューティー宣言」、『駒沢女子大学研究紀要第10号』、駒沢女子大学、2003年
- 注6 本務校での「ライフスタイル論Ⅰ・Ⅱ」という科目である。開始は2000年度。
- 注7 注1の2論で指摘したほか、次の論文と著書でも指摘している。石田かおり「化粧の力うらおもて」、『研修紀要122号』、日本理容美容教育センター、2001年、石田かおり『お化粧品大研究』、PHP研究所、2003年、103～104頁、石田かおり「第5章アイデンティティの化粧」、横田尚美編『ファッションを考える』、丸善、2003年。

参考文献

イバン・イリイチ『生きる思想』、桜井直文訳、藤原書店、1991年
オイゲン・ヘリゲル『弓と禪』、稲富栄次郎・上田武訳福村出版1981年
ミッシェル・フーコー『監獄の誕生』、田村俣訳、新潮社、1977年
ルース・ベネディクト『定訳菊と刀』長谷川松治訳、社会思想社、1972年
伊藤昇『スーパーボディを読む』マガジンハウス1998年
木寺英史『本当のナンバ常足』、スキージャーナル、1994年
甲野善紀『表の体育 裏の体育』、PHP 研究所、2004年
甲野善紀『古武術からの発想』、PHP 研究所、2003年
甲野善紀『古の武術に学ぶ』、日本放送出版協会、2003年
甲野善紀『古の武術を知れば動きが変わるカラダが変わる』、MCプレス、2003年
武智鉄二『舞踊の芸』、東京書籍、1985年
高橋和子『からだ——気づき学びの人間学——』、晃光洋書房、2004年
竹内敏晴『教師のためにからだとことば考』、筑摩書房、1999年
竹内敏晴『思考する「からだ」』、晶文社、2001年
田中聡『不安定だから強い』、晶文社、2003年
野村雅一編『技術としての身体』、大修館書店、1999年
野村雅一『身ふりとしぐさの人類学』、中央公論社、1996年
源了圓『型』、創文社、1989年
林真理子『着物の悦び』、新潮社、1996年
三浦雅士『身体の零度』、講談社、1994年
群よう子『きものが欲しい!』、世界文化社、2002

年

群よう子『きもの365日』、集英社、2004年
矢田部英正『たたずまいの美学』、中央公論新社、2004年
矢田部英正『椅子と日本人のからだ』、晶文社、2004年
矢野龍彦『ナンバ走り』、光文社、2003年
矢野龍彦ほか『ナンバの身体論』、光文社、2004年
養老孟司・甲野善紀『古武術の発見』、光文社、1993年
養老孟司・甲野善紀『自分の頭と身体で考える』PHP 研究所1999年
『靴ぬぎ——日本人とすまい』リビングデザインセンター OZONE、1996年
『畳——日本人とすまい』リビングデザインセンター OZONE、1997年
『しきり——日本人とすまい』リビングデザインセンター OZONE、1998年
参考資料
國保環「丸かじり探検隊 着物で1週間」、毎日新聞2003年11月9日朝刊